

若手研究者海外派遣プログラム報告書

北海道大学大学院生命科学 生命システム科学 修士課程 2年 小林雅比古

出張先：第 41 回北米神経科学会研究会

(41th annual meeting of the Society for Neuroscience; SfN2011)

In Washington, DC at the Walter E. Washington convention Center

新学術領域若手研究者海外派遣プログラムの助成により、この度 2011 年 11 月 12 日～16 日までの 5 日間、アメリカ・ワシントンDCにて開催された第 41 回北米神経科学会(41th annual meeting of the Society for Neuroscience; SfN2011)に参加させていただきました。当会議は神経科学分野における最大規模の研究会であり、世界中から 3 万人以上の研究者が参加し、脳・神経系に関する学術的議論及び交流を深める場となっています。5 日間にわたり、連日 3,000 題以上のポスターが午前、午後と入れ替わり、それと並行して数十もの公演、シンポジウム、ワークショップが開かれました。限られた時間の中で情報を得るために、参加者はみな事前にどの発表を聞くか予定を組む必要があるほど、この研究会には神経科学分野に関するあらゆる情報が集まります。また発表や公演以外の場所では研究者同士の白熱した議論がなされていたり、得た情報をフィードバックするためにPCにまとめていたり、参加者の熱意と真剣さがひしひしと伝わってきました。

私は 14 日の午前 8 時から正午まで、「Epigenetic gene expression dynamics induced by singing regulate a critical period of vocal learning」という題目でポスター発表を行いました。内容は鳴禽類ソングバードの音声発声学習とエピジェネティクス動態の関係性を検証することを目的とし、発声学習の臨界期間における遺伝子発現の変化に関わるエピジェネティクス制御の存在を示唆したものです。



ポスター発表 (矢印：本人)

去年開かれた同会議にも参加し、ポスター発表を行いました。開催規模の大きさ、英語での発表討論ということもあり、発表の直前まで緊張していました。それでも最初の説明以降は比較的落ち着いて発表することができました。また、午前 10 時を過ぎたころから会場全体に人が溢れ、私のポスターにも多くの参加者が聴きにきてくださり、たくさんの方から質問や意見を頂くことができました。

行動とエピジェネティクスという異なる分野を扱う我々の研究において、その両者が一同に介する本研究会への参加は非常に有意義なものとなりました。数々の討論を行うことで、我々の研究の独創性、有用性を再認識できたと共に、補完すべき必要なデータに関する

る意見を頂いたことで研究の今後の方向性をより明確することが出来ました。このような討論は非常に多様な分野の研究者が集まる本研究会への参加でしか得られない稀有な機会であると思います。しかし、参加のための費用として決して少額とは言えず、若手研究者海外派遣プログラムにサポートしていただき今回のような機会を得ることが出来たことに、本当に感謝致しております。第一線で活躍する人々の真剣さを肌で感じられたこと、またそういう人々と同じ土俵で発表することが出来たことは、得がたい経験と大きな自信を与えてくれました。

最後になりましたが、SfN2011に参加するにあたり援助を頂きました、本領域研究若手研究者海外派遣プログラムでお世話になりました先生方、及び領域事務の石澤様に心よりお礼を申し上げます。ありがとうございました。